

谷中村事件についての認識の変化

谷中村の遺跡を守る会・会長

宇都宮大学名誉教授 高際澄雄

みなさん、こんにちは。昨年 3 月末に宇都宮大学を定年退職した高際澄雄です。私は今「谷中村の遺跡を守る会」の会長をしております。どうして、足尾銅山鉍毒事件も谷中村事件についても、たいして知らない私が会長なのかということについて言い訳すると 1 時間位になりますので、今日は省略させていただきます。今日は私自身の見方が大きく変わったということについてお話しさせていただきたいと思います。私は、渡良瀬遊水地のすぐ近くで生まれましたから、谷中村から移り住んできた人の子孫の方と付き合ってきましたので、ある程度谷中村事件について知っているつもりでした。しかし、実際にそのような方と谷中村事件に関して改めて話してみると、全く知らなかったのだということが分かりました。

ある方は、田中正造と対立した村長の孫で、よほど変わり者なのだろうと考えていましたけれども、「谷中村の遺跡を守る会」の会長として訪ねて、改めてお話ししました。すると、その方には大家のご当主としての風格があり、いろいろとお宅の歴史をよくご存じで、お話しくださいました。そして、室町末期からの板碑というもの、これを持っているということは大したことだと思うのですが、それを見せて下さいました。そのお宅は、谷中村から引いてきたということでした。その立派なお宅で、ゆっくりとお話を伺うことで、その方に対する印象が大きく変わりました。

もう一人は、田中正造の秘書を務めた方の、お兄さんの孫です。その方は、私たちが渡良瀬遊水地をラムサール条約に登録したいと言ったときに、反対されました。そのため、どういう考え方を持っておられるのか、非常に理解に苦しみました。しかし改めてお話をすると、その谷中村を離れてずっと苦勞をされてきて、萱を売ることによって生計を立ててきたので、ラムサール条約登録によってその萱の権利がどうなるのか心配された結果だということが分かりました。そのため、谷中村を離れてからの苦勞を私は全く理解していなかったことを知らされました。

こうして半年の経験で分かったことは、谷中村事件が起こった当時の、谷中村内部の複雑さです。そして、複雑な人間関係を抱えていた谷中村にあって、晩年の 9 年間、すなわち田中正造が谷中村に入った 1894 年から、谷中村の存続、そして谷中村が廃村になって以降は、谷中村の復活を唱え、闘い続けた田中正造の偉大さでした。

田中正造の残した文章を読むと異様なほど、その切迫感が伝わってきますが、それは常に果たすべき課題を抱えていたという理由からです。村民に対する説得、県・国への陳情、裁判への対応、こうしたことに田中正造は全力を傾けました。しかも、説をまげることはありませんでした。「責任を取るべきは足尾銅山と政府であり、谷中村民ではない。谷中村民が責任を取るようなことは、亡国、すなわち国が亡びた状態である。これを解消するには谷中村の復活しかない。」このことを田中正造は死ぬまで言い続けました。

さて、それでは今の私たちはどうすべきでしょうか。皆さんにお渡ししましたが、『渡

良瀬遊水地歴史自然ガイドブック』、これを見ていただきたいと思います。これは「ラムサール湿地ネット渡良瀬」(<http://watarase.link/>) が今年 5 月に作ったもので、それをもたらしてきました。中を開いていただきますと、渡良瀬遊水地、この現状が分かります。南側に谷中湖というのが作られて、これがハート型になっています。

さて、これで正造が最後まで阻止しようと全力を傾けた渡良瀬遊水地は作られました。それから谷中村民は住んでいた場所から移り住んでしまいました。田中正造の考えは破綻したのでしょうか。私はそうは思いません。田中正造が主張したことは大変わかりやすい。つまり、人々が平和のうちに自然の恵みを享受しつつ、仲睦まじく、天命を全うするまで暮らせる社会を創ることが政府・自治体・コミュニティ・個人の目標であるべきだということです。

1912 年、すなわち田中正造が亡くなる前年の 1 月 19 日、谷中村の学校がなくなり、藤岡小学校まで通わなければならなかった子どもたちがいました。遠い子どもは 7 キロ歩いて通いました。その子どもたちを励ますために正造は食事会を催し、子どもたちにこう語りかけます。「お互いに仲良く遊び、仲良く勉強して、良い人になりましょう。私もみんなと一緒に仲良くします。それには、お互いに助け合うのが一番です。雪や嵐の日など、辛いことも悲しいこともあります。が、神様は高い、見えないところでよく見ていますから、神様を頼りにみんなで一緒にがんばっていきましょう」。こうして子どもたちと冬の日を過ごしたと島田宗三さんは記しています。田中正造は愛に溢れた人でした。このエピソードを『田中正造翁余録』に書いた島田宗三さんは晩年、田中正造さんの名前を聞くと感激で涙が溢れ、話ができなかったと伝えられています。そして、今も残されている田中正造の生家の床の間には、「愛」の文字の掛軸があります。これは、まだ田中正造が秘書(島田宗三)と出会う前に書かれたものだということを、今日出席されている田中正造大学の坂原さんから教えていただきました。

渡良瀬遊水地が作られてしまいましたが、実は谷中湖のこのハートの形が今話題となり、恋人の聖地になっています。これは、私たちはどちらかと言えば笑って語ってきたのですが、最近違うのではないかと思います。さっきも言ったように、正造は愛に溢れていました。さらに、自分の妻のカツさんには惚れ込んでしまい、ある意味で略奪婚のような格好で結婚したというふうに聞いています。ですから、このハート型となったのはここに共同墓地、延命院、そして雷鳴神社跡が残っていて、谷中村の子孫の方が当時の建設省のブルドーザーの前に立ちはだかってここを守り、そうしてここが史跡保存ゾーンとなった結果です。しかし、このハートの形にしたのはひょっとしたら当時の建設省の方が考えて作ったのではないかというふうに思っています。栃木市はこの渡良瀬遊水地をハートランドと呼び、いろいろなプランを作っています。最近私は、これは良いのではないかと思います。さまざまな利用計画が出されて、最終的にラムサール条約に登録されました。そしてこの場が自然の恵みを体感する場になっているということで、田中正造の考えに合致していると思います。

ですから私としては、渡良瀬遊水地が、田中正造が考えたように亡国、国が滅びた状態から回復し、人々が自然の恵みを享受しつつ、平和の内に助け合いながら天命を全うする暮らしができるように、常に努力し続ける意識を植え付ける場としたいと最近は考えています。以上で私の報告は終わりたいと思います。